

## 『自然共生サイト申請のポイント』～都市近郊の緑地の研究から見た課題～

名城大学農学部生物環境科学科景観解析学研究室 准教授 橋本 啓史

### 1. 境界・名称に関する基準

ア 地理的に画定された区域であること

イ 区域の面積が算出されていること

→国際的な OECM のデータベースに登録し、30by30 の目標達成率を測るために必須

ウ 名称が付されていること

### 2. ガバナンスに関する基準（一部省略）

#### 2.1. 活動権限に関する基準

##### 2.1.1 活動権限の存在

ア. 区域内の土地に対する統治責任者及び活動責任者が特定されていること

イ. 統治責任者、活動責任者が区域の範囲に同意していること

→申請主体は必ずしも土地所有者でなくてよい。

##### 2.1.2 活動の衡平性

#### 2.2. 活動措置に関する基準

##### 2.2.1 活動措置に関する基準

##### 2.2.2 実施体制の長期継続性に関する基準

ア. 統治責任者及び活動責任者が法人、団体の場合には、解散する予定がなく、統治責任者及び活動責任者としての立場の期間が継続すること

→概ね5年程度の継続が見込まれること。一部の熱心な担当者の異動・転勤・退職により活動が停滞しないような体制づくりが望まれる。

### 3. 生物多様性の価値に関する基準

ア

#### 保全上重要な場

(1) 公的機関によって、生物多様性保全上の重要性が既に認められている場としての価値

→現時点では環境省が関与して指定した重要な場所だけだが、将来的には既存の民間認証で認められた場所が簡易的な申請手続きで認められるようになる可能性も。

(2) 原生的な自然生態系が存する場としての価値

(3) 里地里山といった二次的な自然環境に特徴的な生態系が存する場としての価値

→企業の保有する土地でも、かつては里地里山だったところは候補となるが、管理ができていないかが重要（里山林は放置すると植生遷移が進んで暗い単調な森となり、生物多様

性が低下している場合がある)。一方で、企業自身が保有していない場所でも、里山管理への参加（ボランティア活動や社員研修）や管理団体への協力（資金援助）という形で自然共生サイトに関わる（貢献証書が得られる）やり方も考えられる。里山や二次的な自然を有する緑地の樹林管理に関わる市民団体は、資金不足や高齢化、新入会員の減少（定年延長もひとつの要因）で困っている。

（４）生態系サービス提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場としての価値

→都市部の自然共生サイトには主にこの価値がある。植栽地でもよいが、「在来種を中心とした」植栽で、野生動物（昆虫や鳥類など）の生息地となっていることが示せることが望ましい。

（５）伝統工芸や伝統行事といった地域の伝統文化のために活用されている自然資源の供給の場としての価値

#### 保全上重要な種

（６）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場としての価値

→都市近郊でも希少な動植物種も存在しうる。専門家（やハイアマチュア）に調査を依頼し、申請時にはある程度詳細な、様々な分類群での調査結果が示せるとよい。ただし、たまたま通過中に記録されただけではなく、継続的に記録され、その種の生息地（あるいはその一部）となっていることが示せることが望ましい。

（７）分布が限定されている、特異な環境へ依存するなど、その生態に特殊性のある種が生息生育している場又は生息生育の可能性が高い場としての価値

→庭園や工場緑地でも、ある種の生物にとって特殊な生息・生育環境あるいは産卵場所などを提供していることがある。

#### 保全上重要な機能

（８）越冬、休息、繁殖、採餌、移動（渡り）など、動物の生活史にとって重要な場としての価値

→たまたま通過中に記録されただけではなく、継続的に記録され、その種の生息地（あるいはその一部）となっていることが示せることが望ましい。動物の場合、ある程度広い面積の生息地を必要とするが、種によってその面積は異なる。また、種によっては、繁殖場所と採餌場所が少し離れていてもよいものや、ひとつひとつの採食場所の規模にこだわらず、点在する小規模な緑を使って生息・繁殖できるものもいる。

（９）既存の保護地域又は自然共生サイト認定区域に隣接する若しくはそれらを接続するなど、緩衝機能や連続性・連結性を高める機能を有する場としての価値

→継続的に記録され、その種の恒常的な移動路となっていることが示せることが望ましい。都市部の小規模なビオトープや公開空地・屋上緑化も、この機能を持っていると考えられる。一企業だけでなく、近隣の企業が合同でエコロジカルネットワークを形成している

ことをアピールし、自然共生サイトに申請することにも期待（知多半島などはこの例）。

#### 4. 活動による保全効果に関する基準

##### 4.1 活動の有効性に関する基準

ア. 区域の活動目的及び活動の内容が、3.アに掲げた生物多様性の価値に負の影響を与えるものではなく、長期的な域内保全に貢献するものであること

→新たに管理計画を立てる場合は、専門家の助言を仰ぐことが望ましい。現状の管理で上手くいっている場合でも、それが生物多様性保全に配慮したものになっているということを説明できることが望ましい。

イ. 区域の活動が継続的に行われていること。ただし、年間の一部の時期のみ行われている活動により生物多様性の価値の通年保全が図られている場合は、この限りではない。

ウ. 3.アに掲げた生物多様性の価値に対する脅威が特定されており、有効と考えられる対策が検討又は実施されていること。

→密猟又は盗採等の行為、外来種の侵入又は拡大、水質又は土壌等の汚染などの対策

エ. 3.アに掲げた生物多様性の価値に影響を及ぼす現行又は将来の開発計画が存在しないこと。

→将来の開発可能性を残しておくため、自然共生サイトへの指定をためらわれている企業・自治体も多いのが現状ではないだろうか。少なくとも5年間は自然共生サイトとして保全・管理を継続してほしいが、長期的に開発は一切だめになるということではない。ただし、自然共生サイトは既に関係計画がある場所をストップさせる手段にはならないが、認定後は一定期間は（内外からの）開発圧を拒む理由とはなり得る？

##### 4.2 モニタリングと評価に関する基準

ア. 次のいずれかに該当すること。ただし、人為的な手を加えないことを含む現状の活動を継続することによって、土地の大きな改変を予防するとともに、3.アに掲げた生物多様性の価値を大きく劣化させるおそれがない場合は、この限りでない。

(1) モニタリング調査を概ね5年に一度の頻度で実施している又は実施する見込みであり、その内容が妥当であること

→すべての分類群で詳細な調査をすることまでは求められていないが、特定の1種のみの存在有無のモニタリングだけでは寂しい。環境省も簡易的なモニタリング手法を検討中。地元の専門家や自然観察者・団体に協力を仰ぎ、社員や地域住民と定期的に自然観察会をしながらモニタリングをしていくことも考えられる。

(2) 区域内の動植物種の生息生育状況が、自治体のレッドリスト評価における調査又はモニタリングサイト1000調査等によって把握されており、場の状態に大きな変化がないことが少なくとも5年に一度の頻度で確認されている又は確認される見込みであること

イ. 4.2.アに定める調査又は確認の結果について、概ね5年に一度、環境省の設置する専

門家委員会に提出できる見込みであること。

ただし、次のいずれかに該当する場合は、この限りでない。

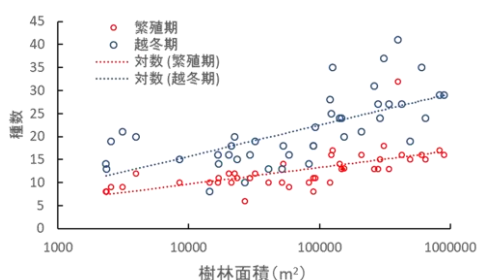
(1) 自然再生協議会、地域連携協議会その他の専門家を含む幅広い関係者で構成される協議会等の適切な評価主体が存在し、確認又は調査結果を当該評価主体に提出し、評価を受ける見込みである場合

(2) 人為的な手を加えないことを含む現状の活動を継続することによって、土地の大きな改変を予防するとともに、3.アに掲げた生物多様性の価値を著しく劣化させるおそれがない場合

参考) 名古屋市の都市緑地における樹林面積と樹林性鳥類の出現率との関係 (『名古屋市野鳥生息状況調査報告 名古屋の野鳥 2014) を参考に集計)

種名	繁殖期			生息地タイプ
	<1.0	1.0-9.9	10-100	
オオルリ	0	0	5	森林内部
ヤブサメ	0	0	5	森林内部
ヤマドリ	0	0	5	森林内部
ヨタカ	0	0	5	林縁
サンショウクイ	0	0	5	森林内部
トラツグミ	0	0	5	森林内部
サンコウチョウ	0	0	11	森林内部
フクロウ	0	0	11	森林内部
アオゲラ	0	0	11	森林内部
アオバト	0	0	16	森林内部
イカル	0	0	11	ジェネラリスト
トビ	0	6	11	林縁
コジュケイ	0	0	16	林縁
オオタカ	17	6	16	ジェネラリスト
ホトトギス	0	6	21	ジェネラリスト
キジ	0	28	21	林縁
ヤマガラ	0	0	53	ジェネラリスト
ホオジロ	0	17	37	林縁
ウグイス	33	6	42	ジェネラリスト
キビタキ	0	0	68	森林内部
エナガ	0	6	63	ジェネラリスト
モズ	50	33	63	林縁
コゲラ	17	56	95	ジェネラリスト
メジロ	50	56	95	ジェネラリスト
シジュウカラ	17	67	100	ジェネラリスト
ハシブトガラス	50	83	89	ジェネラリスト
カワラヒワ	100	89	95	林縁
ムクドリ	100	94	95	林縁
ヒヨドリ	100	94	100	ジェネラリスト
キジバト	100	100	100	林縁
ハシボソガラス	100	100	100	ジェネラリスト
スズメ	100	100	100	ジェネラリスト
種数合計	14	19	33	
調査地点数	6	18	19	

種名	越冬期			生息地タイプ
	<1.0	1.0-9.9	10-100	
フクロウ	0	0	5	森林内部
トラフズク	0	0	5	林縁
アリスイ	0	0	5	林縁
マヒワ	0	0	5	ジェネラリスト
ヤマドリ	0	0	5	森林内部
ツミ	0	0	11	ジェネラリスト
ヒガラ	0	0	11	森林内部
キレンジャク	0	0	11	ジェネラリスト
コジュケイ	0	0	11	林縁
ヤマシギ	0	0	11	ジェネラリスト
ミソサザイ	0	0	21	ジェネラリスト
ビンズイ	0	0	21	ジェネラリスト
ソウシチョウ	0	6	16	ジェネラリスト
キジ	17	6	16	林縁
アトリ	17	0	21	ジェネラリスト
ミヤマホオジロ	0	0	26	ジェネラリスト
クロジ	0	0	26	森林内部
アオゲラ	0	0	32	森林内部
アカハラ	0	6	26	森林内部
アオバト	17	6	26	森林内部
ウソ	0	6	37	ジェネラリスト
イカル	17	0	37	ジェネラリスト
トラツグミ	0	11	37	森林内部
ハイタカ	0	11	42	ジェネラリスト
トビ	33	11	37	林縁
ノスリ	33	11	47	林縁
カシラダカ	33	17	47	林縁
アカゲラ	17	6	68	ジェネラリスト
エナガ	0	11	68	ジェネラリスト
カケス	17	11	68	ジェネラリスト
シメ	17	33	47	ジェネラリスト
ホオジロ	50	28	47	林縁
オオタカ	17	17	74	ジェネラリスト
ヤマガラ	0	11	84	ジェネラリスト
ルリビタキ	0	22	84	森林内部
コゲラ	33	56	89	ジェネラリスト
モズ	83	44	84	林縁
アオジ	67	67	95	林縁
ハシブトガラス	67	83	84	ジェネラリスト
ウグイス	83	61	100	ジェネラリスト
シロハラ	67	67	100	森林内部
ジョウビタキ	83	67	100	林縁
カワラヒワ	83	72	95	林縁
シジュウカラ	50	83	100	ジェネラリスト
メジロ	100	72	100	ジェネラリスト
ムクドリ	100	94	95	林縁
ツグミ	100	89	100	林縁
ヒヨドリ	100	100	95	ジェネラリスト
スズメ	100	94	100	林縁
キジバト	100	100	100	林縁
ハシボソガラス	100	100	100	林縁
種数合計	29	35	52	
調査地点数	6	18	19	



樹林面積と樹林性鳥類の種数